

ベンジャミン・フランクリン

——アメリカ啓蒙の起源——

田 中 秀 夫

I 職人から思想家へ

それぞれの地域や国の啓蒙にはたいてい啓蒙の父というべき思想家がいる。また思想家や学問芸術を庇護するパトロン——王室や貴族、富豪、あるいは財団や国家——も存在する¹⁾。啓蒙の父とすべき人物としてあげられるのは、イングランド啓蒙におけるロックや、オランダの啓蒙におけるスピノザやグロティウス、フランス啓蒙におけるデカルト、あるいはヴォルテールやモンテスキュー、そしてスコットランド啓蒙におけるハチスンまたはケイムズである。ケイムズは法曹貴族・地主として自らがスミスなどのパトロンでもあった。啓蒙思想家の思想傾向は保守から急進まで多様であり、物質的、階級的基盤も多様であるから、また彼らが追究する価値と思想はデ・ファクトの体制や所与の伝統と対立する傾向があるから、思想家とパトロンの関係は案外複雑である。パトロンとプロテジェの間には単純な支配—服従の関係とは限らない。

パトロンとしては、いうまでもないことだが、王室や貴族が際立っている。フィレンツェのメディチ家はあまりにも有名である。イングランドではホップズのデヴォンシャー公爵、ロックのシャーフツベリは有名である。スコットランドにはアーガイル公爵、ビュート卿、ダンダスといった人物がいてパトロンとなった。ヒュームにはセント・クレア將軍、コンウェイ將軍、ハーフォード

1) Griffin, Dustin, *Literary Patronage in England 1650-1800*, Cambridge U. P., 1996. Edward G. Andrew, *Patrons of Enlightenment*, Toronto U. P., 2006. などの研究がある。

卿などの庇護者がいたし、スミスはバックルー公爵家との関係がよく知られている。イングランドではプライスやプリーストリを庇護したシェルバーンが有名である。アイルランドのモールズワースはトランドを支援した。

ドイツにおいては啓蒙の父は、ライプニッツであろうか、あるいはカントと見なすべきであろうか。パトロンとしてはフリードリヒ大王が筆頭であろう。フリードリヒは自ら『反マキャヴェッリ』を著した啓蒙思想家であったが、ヴォルテールなどの庇護者であった。庇護者にとって思想家の国籍などはしばしば二の次であった。ロシアのエカテリーナもまた学問の振興のために外国から啓蒙思想家を招聘しようとした。デイドロやベンサムがそうである。この種の例は他にも多数あげることができる。このように、啓蒙にはナショナルなアイデンティティが強く現れる場合もあれば、コスモポリタンである側面もある。

18世紀のアメリカは依然として大ブリテンの辺境にすぎなかった。しかし、いまだ植民地であったアメリカにも、フランクリンのような、イングランド、スコットランド、フランスの啓蒙思想家と広く交流する典型的な啓蒙知識人が登場していた。平等の国アメリカには有名なパトロンはいないが、植民地社会自体がパトロンの役割を果たした。ニュージャージーの長老派がプリンストン大学にウィザースプーンを招聘した場合などは、そのような事例である。

40年にわたってフィラデルフィアを拠点にして、職人、商人、思想家、政治家として活躍したフランクリンはまさにアメリカ啓蒙の父というべき存在である。フランクリンは、階級の出自も異なれば知識人としてのタイプも異なるものの、その守備範囲の広さからも長い活動期間からも、スコットランド啓蒙におけるケイムズ卿に比すべき人物であった。フランクリンは実際にケイムズ卿と親密な交流をしてもいた。

フランクリン抜きには啓蒙都市フィラデルフィアの発展を考えることもできないければ、アメリカ啓蒙を思い描くことも困難である。フランクリンはアメリカのために活動することによって大ブリテンの臣民として貢献しているつもりであった。フランクリンにとって、アメリカもペンシルヴァニアも、パトリで

ありネイションである以上にプロヴィンスであった。アメリカ啓蒙を代表する啓蒙の装置、フィラデルフィアのアメリカ哲学協会はフランクリンの肝いりでできたものである。それは王立協会やダブリンの哲学協会を意識していたが、むしろエディンバラの選良協会や哲学協会に対応するものと見なしたほうがよいだろう。そしてアメリカ啓蒙の一特徴は、スコットランドと同じく、大学が啓蒙の装置として機能したことにある。

ペンシルヴァニアに自由を求めたウィリアム・ペンという先駆者がいたとすれば、フィラデルフィアには、政治家、学者、パトロンとして啓蒙を準備した先駆者ジェームズ・ローガン (James Logan, ?-1751) もいた²⁾。啓蒙思想家フランクリンには先駆者がいたのである。キューカーのウィリアム・ペンは国王チャールズ2世から領主権を得て入植した土地を「シルヴァニア」(シルヴァは森を意味する)と名づけた。それにペンの名がついたのである。1682年に建設され州都となったフィラデルフィアは、やがて北部13州の政治経済の中心となるとともに、独立革命の象徴ともなった。その州議会議事堂で1776年7月「独立宣言」が採択され、自由の鐘が鳴らされたのであり、以後1790年から1800年までは合衆国連邦の首都ともなった。

フランクリンが当地にきたのは1723年である。この年にスコットランドでは、アダム・スミス、アダム・ファーガソン、ジョン・ウィザースプーンなどが生まれた。前年にはジョン・ヒュームやアレグザンダー・カーライルが生れている。カントがドイツで生まれるのはその翌年である。

やがて親交を結ぶケイムズ卿 (Henry Home, Lord Kames, 1696-1782) より10歳年少、デイヴィッド・ヒュームより5歳年長であるベンジャミン・フランクリンは、1706年にボストンの蠟燭屋の子として生まれ、厳格なピューリタニズムの環境で育ち、正式の学校教育は2年しか受けられずに、12歳で腹違いの

2) コマジャーはローガンをイングランド啓蒙のパトロン、探検家やブラント・ハンターの支援者ジョージ・バンクスに対応する人物だとしている。Commager, Henry Steel, *The Empire of Reason: How Europe Imagined and America Realized the Enlightenment*, Weidenfeld and Nicolson, 1978, pp. 4-6.

兄の経営する印刷屋の徒弟となった。信教の自由を許したフィラデルフィアは急速に発展を遂げつつあった。印刷、出版、新聞業で先駆的であったこの都市は病院や慈善施設でも先進的であり、アメリカが誇る国際的な文化都市になりつつあった。

徒弟修業に満足できなかったフランクリンは、1723年にフィラデルフィアへと出奔し、その翌年にはロンドンへ渡った。時に大ブリテンはウォルポールの時代であって、政治経済の繁栄と言論出版の自由を支えられた文運の隆盛にロンドンでは賑わっていた。そうしたロンドンでフランクリンは印刷職人として働き、1725年にはマンデヴィルと出会った。フランクリンには、マンデヴィルはひょうきんな楽しい人物に思われたらしい³⁾。『ぶんぶんうなる蜂の巣』と題する風刺詩として1705年に刊行された小著から成長して改題された『蜂の寓話』は、上流の洗練を大衆化しようとしたアディソンとスティールの『スペクテイター』や、反政府の論陣を張ったトレンチャードとゴードンの『カトーの手紙』とともに、オーガスタン時代（広義に18世紀前半を指す）を代表するユニークな書物である。ウォルポールの平和は腐敗政治を伴い、体制を擁護するコート派（宮廷＝政権）と政府批判を精鋭化するカントリ派（在野＝地方）の論争が激しく展開されていたから、若いフランクリンがそのような論争に無関心であったとは考えにくい。今は推察の域を出ない。

「徳の起源の考察」などの解説がつき、『蜂の寓話』と改題して本格的な社会批評の書物として刊行されたのは、1714年であった。1723年には慈善学校を有害無益と断じる「慈善学校論」と「社会の起源」の2編を加えた増補版が出た。この版こそマンデヴィルが真に注目されるに至ったものであって、ミドルセックス大陪審が本書を世に荒廃をもたらす悪書として槍玉にあげ、マンデヴィルが弁明するという「モラル」をめぐる応酬が始まっていた。翌年にはマンデヴィル自身の弁護論を収録した「いわゆる第3版」（実際には第4版）が

3) Houston, Alan, introduction to his ed. *Franklin, The Autobiography and Other Writings on Politics, Economics, and Virtue*, Cambridge U. P., 2004, p. xxvi.

刊行され、『蜂の寓話』論争がまだ世間を賑わしていたのであった。エミグレ知識人で医師のマンデヴィルは、当時のロンドンと大ブリテンの商業社会を鋭く風刺したものの、全体としては、社会の腐敗・悪徳を描写しながらも、現状を繁栄として是認する体制側のイデオログであり、コート・ウィッグであったから、この告発は宗教とモラルの側のものであった。

こうした喧騒のなかで、フランクリンは、大都会（文化都市）ロンドンのクラブやコーヒーハウスでの知的交友を楽しんだものと思われる。フランクリンは、この年に『自由と必然を論ず』を刊行している。

1726年にフィラデルフィアに戻った20歳の印刷職人フランクリンは、ケイマー印刷所に加わり、その翌年には職人仲間とクラブ「ジャントー」（結社）を結成した。1729年に印刷屋として独立した彼は『ペンシルヴァニア・ガゼット』を買収して、紙面を刷新するとともに、1732年には暦の出版に着手し、『貧しいリチャードの暦』（1733-1758）で成功した。デフォーを尊敬していたフランクリンが儉約と自己教育の精神を説いたことはあまりにも有名である。

こうした産業的成功を基礎に、フランクリンは、新興の実業家として、仲間と協力して、1730年に組合図書館、1736年に消防組合、1743年にアメリカ哲学協会、1751年にフィラデルフィア学院などを作る一方、やがて力点を科学技術の研究と政治活動に移す。1741年に空気の流れを応用した「フランクリン・ストーブ」を発明したのち電気の研究を始め、1751年には『電気に関する実験と観察』を出版し、避雷針を提案した。嵐の実験によって雷の稲妻と電気の同一性を証明した彼は、1756年には英国学士院会員に選ばれた。独学で知識人としても最高の栄光にまで上り詰めたと言えよう。しかし、学者となったフランクリンを待ち受けていたのは、祖国大ブリテンとアメリカの政治的動乱であった。

II 学会と教育

第I節で触れたように1724年からのロンドン滞在で、フランクリンがウォールポール時代のメトロポリスの文化的・商業的な繁栄に接したということは、無

視できないことのように思われる。フランクリンが知りえた『蜂の寓話』論争は、「社交性」sociabilityと商業社会をめぐる論争であった。論争当事者は商業社会がもたらす社交性をめぐって様々な見解を提出した。徳と腐敗を焦点とするオーガスタン論争は、市民的公共性の産物でもあった。オーガスタン時代のイングランドはおそらく前代未聞の新しい市民社会を大きな規模で生み出しつつあった。そしてそれは文化的辺境がやがて追いかける未来社会でもあった。

市民的社交的世界にはいくつもの側面あるいは層があって、そのなかには、貴族的な洗練と上品さを繰り広げる上流文化と公共心と仁愛の倫理もあれば、中間層のやむことない権力欲・功名心・利己心の追求やホガースが好んで描いたような下層民衆の猥雑・野卑な大衆文化もあった。シャーフツベリやハチスンが前者に力点を置いたとすれば、マンデヴィルは前者の欺瞞・偽善を暴き、真実の社会的現実として後者に注目した。市民的社交性の世界は、小さな規模では、共和政オランダなどの都市に先駆があったかもしれない。啓蒙の国際都市は多かれ少なかれ、新しい市民社会というべき特徴を持っていたであろう。その典型、最先端がオーガスタン時代のロンドンにあった。

フランクリンがロンドンで見たものは、フィラデルフィアでの市民社会の形成に生かされたであろう。学会と教育の提案その他に市民社会の形成を目指すフランクリンの思想が盛り込まれていた。フランクリンは前述のように、1743年に「アメリカ哲学協会」の設立を提案した。協力者はクェーカー教徒の農民・植物学者のジョン・バートラムやピーター・コリンスンであった。

「人びとが当座の必需品にばかり心を奪われる、新しい植民地建設の初めの骨折り仕事は、もう峠を越した。ひと息ついて、技芸を陶冶し、皆の知識の貯えを増進するような暇ができてきた人びとが各地で多く見られる。思索型の人には、ときおり多くの暗示が生じたり、いろいろな所見が頭に浮かんだりするにちがいない。そういったものは、仔細に検討し、追求し、向上させれば、イギリス植民地のいくつかあるいは全部の利益になるような、または全人類の役

に立つような発見を生むかもしれない。』⁴⁾

しかしながら、アメリカは広大で、人々は分散しているので、情報交換にしても容易でない。そこで学術協会を作り、フィラデルフィアに中心を置き、会員が交流を深めようというのである。さらに提案は、ロンドンの英国学士院、ダブリン協会との交流も行うとした。しかしながら、こうした協会だけで、学問の新興と成果の共有には十分ではなかった。そこでフランクリンは、その数年後にはペンシルヴァニアに大学を設立しようと呼びかけた。1749年10月の『ペンシルヴァニアにおける若者の教育に関する提案』がそれである。

すでに植民地には4大学があった。マサチューセッツのハーヴァード、コネティカットのエール、ヴァージニアのウィリアム・アンド・メアリ、そしてニュージャージー大学（のちプリンストン大学）である。フランクリンは、主として、ミルトン、ロック、フォードイス（ただしフランクリンは、フォードイスの『教育論』をハチスンの著作と誤認していた）、ウォーカー、ロラン、ターンブルなどの教育論その他を参照しつつ立論している⁵⁾。ミルトンとロックはイングランドのピューリタンであり、フォードイスとターンブルは、スコットランド、アバディーンの教授で、長老派であった。フォードイスの教育論がハチスンのものとされていたのは匿名だったからであろう⁶⁾。全体として、この教育案の根底に流れている思想は、プロテスタントの啓蒙という性格のものであると予想してよいだろう。その内容は、啓蒙思想家フランクリンの教育論としてなかなか興味深いものがある。

-
- 4) 池田孝一訳『アメリカ古典文庫1 ベンジャミン・フランクリン』研究社、1975年、39ページ。
 5) John Milton, *Paradise Regain'd... With a Tractate of Education*, 5th edn (1721), John Locke, *Some Thoughts concerning Education*, 11th edn (1745), David Fordyce, *Dialogues concerning Education*, 2 vols. (1745-1748), Obadiah Walker, *Of Education* (1687), Charles Rollin, *The Method of Studying and Teaching in Belles Lettres*, 4 vols., 4th edn (1749), George Turnbull, *Observations upon Liberal Education* (1742).
 6) 「本書で引用された著者」として4人目に挙げられている説明はこうである。「『教育についての対話』2巻、オクタヴォ版、大いに評価されており3年間に2版が出た。才能豊かなハチスン氏（『情念論』の著者で、『美と徳の観念』の著者でもある）によって書かれたと想定されているが、彼は青年の教育に経験豊富なグラスゴウ大学の教授である。」Houston (ed.), *op. cit.*, p. 204.

「正規の教養教育を受けられるアカデミー」がないのは当地の青年の不幸であるとの問題提起からこの小冊子は始まる。「青年のためのよい教育」は「家族と国家の幸福の最も確実な基礎」であると古来賢人は考えてきた。したがって、「ほとんどすべての政府が、自分自身と祖国に敬意を払って社会に尽くすことができる人間を次代に残せるような学校を設立し、相応の財源を与えることを重視してきた。」⁷⁾

そこで町の近郊に学校を建て、図書館を設け、各国の地図、地球儀、数学用具、物理学の実験装置、機械学の装置、鉱石見本、建物、機械学などあらゆる種類の物に関する印刷物を備える。「校長はよき分別を有し、品行が正しく、勤勉で忍耐強く、諸国語および諸科学に通じ、英語を純正に話しかつ書く者とする。その下に必要な教師を置く。」⁸⁾

学科についてはこう提案している。「最も有用で最も装飾的であるようなものを教えること」で、それは学生の将来の職業を考慮したものである。きれいな書法で早く書くこと、版画の模写、遠近法による絵画、算術、会計、幾何学と天文学の初歩。英語は文法により教える。最上の作家、アディスン、ポーブ、アルジャーノン・シドニ、(トレンチャード、ゴードンの)『カトーの手紙』などを古典とすべきである。それは「文体が明瞭かつ簡潔」だからである。

文体を習得させるには手紙を書かせて読んだものの要約を書かせ、教師が書きなおして、指導する。発音を習得させるためには朗読、演説などをさせて、アクセントの矯正など手助けする。(このあたりはスコットランドの啓蒙思想家たちが発音を矯正するためにシェリダンなどを招いたことを髣髴させるものがある。)

興味深いことに、フランクリンは以下の大半を歴史教育の説明に割いている。彼は歴史を重視したが、それは歴史が他の諸分野の知識と不可分であるということとも関わる。「歴史、たとえばギリシアやローマの歴史家の翻訳や古代ギ

7) Houston (ed.), *op. cit.*, pp. 204-205, 邦訳, 前掲書, 45ページ。

8) Houston (ed.), *op. cit.*, p. 206, 邦訳, 前掲書, 46ページ。

ロシアやローマに関する現代の歴史などをたえず読ませれば、ほとんどあらゆる種類の有益な知識を有利に、また学生にとって楽しく、手引きできるのではなからうか⁹⁾というこゝで、その関連で、地理学、年代学、古代の習俗、道徳が歴史とともにいかに学ばれるかを簡単に説明している。

『道徳』は、歴史に表われる人の性格、財産、権力などの興亡の原因を論じ、たえず考察・観察することによって教える。節制、秩序、儉約、勤勉、忍耐などの利点についても同じである。実際、よき歴史を読めば、一般的な自然の傾向として、すべての種類の徳、公共精神、剛毅などの美しさと有益さについての深い印象を青年の心に与えるのである。¹⁰⁾

このように歴史が道徳と徳を教えるが、それだけではない。第二に、雄弁術 (Oratory) の意義もまた歴史から認識できる。「歴史を教えることにより、人類の大集団、軍隊、都市、諸国民を統治したり、向きを変えたり、導いたりする際に、どんなに『雄弁術』が素晴らしい効果をもつかを示せよう。」しかし「現代の政治的雄弁術は言論出版によって主に遂行されているので、いくつかの点での古代の政治的雄弁術に対する現代の政治的雄弁術の有利さが示されるべきである。というのはその影響はより広く、より永続的だからである。」¹¹⁾

さらに歴史は宗教の意義も教える。「公共的宗教」の必要性、すなわち、公衆にとっての有益性、諸個人にとっての宗教的性格の利点、迷信の害、すべての宗教の中でキリスト教が卓越していることを歴史は教える。この点に関して、フランクリンはターンプルの議論を踏まえていることを注記している。

第四に、歴史が教えるのは「市民的秩序や国制の利点、社会に結合し政府を設立することによって人びとと彼らの財産がいかにして保護されるか、彼らの勤労が奨励され報償を受け、技芸が発明され、人生がはるかに快適になること、

9) Houston (ed.), *op. cit.*, p. 209, 邦訳, 前掲書, 47ページ。

10) Houston (ed.), *op. cit.*, p. 210, 邦訳, 前掲書, 48ページ。

11) Houston (ed.), *op. cit.*, p. 210, 邦訳, 前掲書, 48ページ。

自由の利益、放縦の災害、よき法と正義の正しい執行から生じる利益、等々」¹²⁾であり、こうして政治学の第一原理が青年の心に定着するであろう。

歴史からは善悪、正邪も問題になる。そうした問題については青年に討論させるのがよい。真理を発見する方法、推論の技術、弁護の論法、説得術などを理解させるのであり、その際にはグロティウスとプーフENDORFなどの著作が利用できる。公開討論は想像力を高め、勤勉を刺激し、自然の諸能力を強化するからである。

フランクリンは、翻訳ではなく、原語で古典を読むことを推奨する。歴史に登場する偉人はギリシア語とラテン語という最良の、最も表現力に富み、語彙が豊富な、美しい言語を話したのであって、「最上の著作、最も正確な作品、人間の機知、叡智の最も完璧な著作物は、それらの言語で書かれ、すべての時代に存続し、人間がこの世にある限り存続するであろう。」それで神学志望者はラテン語とギリシア語、物理学志望者はそのほかにフランス語、法律志望者はラテン語とフランス語、商人志望者はフランス語とドイツ語とスペイン語を学ぶべきである。

最後に新しい『世界史』を学ぶべきである。その次に近代史、特にわが母国の歴史、そしてさらに植民地の歴史へと進むと良い。それには「植民地の興隆、発展、大ブリテンにとっての効用、奨励、妨害等々、また植民地を繁栄させ、その自由を保証する手段等々」についての考察が伴うべきである。

こうした歴史の次に自然史・博物学、園芸と農業を教えるのが有益である。「商業の歴史、すなわち諸技術の発明、諸製造業の勃興、貿易の発展、その中心地の変遷、およびそれらの理由、原因などの歴史も、青年にとって面白くなるであろうし、皆に役に立つであろう。そしてこれは他の分野の歴史における、戦争に使われた原動力や機械の巨大な力と効果の説明と相まって、自然に、機械学を学びたいという願望、力の弱い人間がそうした脅威を行い、労働が節約され、製造が促進される等々の、その技術の原理を知りたいという願望を起さ

12) Houston (ed.), *op. cit.*, pp. 210-211, 邦訳、前掲書、48ページ。

せるであろう。こうなれば、……機械哲学の講義をする時期であろう。』¹³⁾

こうした説明の後、最後に次の文章で結ばれている。「何が真の価値であるかということも、またつねに青年に示し、それは、人類、祖国、友人と家族に仕えようとする性向と能力にあるのだと説明し、心に銘記させるべきである。その能力は（神の祝福を得て）真の学問により、習得され、あるいは増大され、すべての学問の大きな目標、目的であるべきである。』¹⁴⁾

このような教育案にフランクリンの啓蒙思想家としての価値観が刻印されていることは言うまでもないであろう。それは個人が教育によって自らの能力を高め、開発し、公共へも貢献できる人間になるという理念である。フランクリンはこれ以外に「英語学校案」も公表した。これは古典語を中心とする教育のほか、実業教育を中心とする教育案であって、教育の複線化を説くものである。第一学級から第六学級まで、段階的に英語力を高めることを中心とするカリキュラムを提案しているが、読書リストとして、第二学級では『スペクテイター』の小品、第三学級でロランの『古代史』および『ローマ史』、ノエル・ブリュシュ『自然の光景』、第四学級ではテンプル卿、ポープなどの書簡、ジョンソン博士の『基礎倫理学』、第五学級では『スペクテイター』、ジョンソン博士の『知性論』、そして第六学級ではティロットスン、ミルトン、ロック、アディソン、ポープ、スウィフト、『スペクテイター』、『ガーディアン』、ホメロス、ウェルギリウス、ホラティウス、フェヌロンの『テレマコス』、シュヴァリエ・ラムジーの『シラスの旅』を挙げている¹⁵⁾。このリストは興味深い。英語学校は職業課程重視だとしても、いかにフランクリンが古典と現代の重要な文献の教養を重視したか、このリストから容易に理解しうるであろう。

歴史教育を重視する先の教育案が出されたのは前述のように1749年で、フランクリンが43歳の時のものである。英語学校案は1751年にリチャード・ピー

13) Houston (ed.), *op. cit.*, p. 213, 邦訳, 前掲書, 50ページ。

14) Houston (ed.), *op. cit.*, pp. 213-214, 邦訳, 前掲書, 50-51ページ。

15) Houston (ed.), *op. cit.* 邦訳, 前掲書, 51-56ページ。

ターズの『教育に関する説教』の巻末付録として刊行された。一見すると少し早いようにも思えるが、フランクリンはこのように経験も思慮も十分に備わった40代半ばに教育案を出した。

1746年には、植民地4番目の大学として、ニュージャージーに大学ができ、しばらくしてプリンストン大学と改称した。中心となったのは植民地の長老派のなかで、もう一度信仰に重点を置こうとした革新派のニュー・サイドであった。やがてプリンストンにはスコットランドからウィザースプーンが学長に迎えられ発展期を迎える。

フランクリンはペンシルヴァニアにも大学が必要だと考えたのであり、1755年にフィラデルフィア大学 (New College, Academy, and Charity School of Philadelphia) の設立が決まった。これはオールド・サイドのアリソン (Francis Allison) が中心となり、スコットランド出身のアングリカン (国教徒) であったウィリアム・スミス (William Smith) が協力した。ピューリタンではあったが、キリストの神格を否定したフランクリンは理神論的であり、オールド・サイドとも思想的傾向は違っていた。とはいえ、フランクリンの実学重視のプラクティカルな思想と教育案はある程度は影響を与えたのではないだろうか。実際に、スミスが設けた職人養成クラスのカリキュラムはフランクリンの英語学校案に似ていることをスミスは認めた¹⁶⁾。けれども、フランクリンがこの大学に直接の影響力をもてなかったとすれば、それはフランクリンが植民地を代表してロンドンに渡ることになったことにもよる。

III フランクリンの経済思想

18世紀後半になるとブリテン帝国は明確なイデオロギーとなり、プロテスタント、海洋、商業、自由がブリテン帝国の特徴とされた。この帝国にとってアメリカの地位はどのようなものであり、望ましい関係は対等なのか、従属なの

16) Sloan, Douglas, *The Scottish Enlightenment and the American College Ideal*, Teachers College Press, 1971, p. 83.

かが問われた。すでに1751年にフランクリンは人口論を出版し、アメリカの高度成長を指摘していた（この論説はレイシズムむき出しの主張を含んでいるのに、フランクリンがあまり攻撃されていないのは、ヒュームが黒人の才能を疑問視する片言隻句によって、しばしば弾劾されているのと好対照である）。とはいえ、植民地が幼弱である間は、支配と保護の関係はさほど疑問にはならなかった。英仏七年戦争の終結によって、支配と保護の関係は変容の時を迎えた。

植民地は急成長を遂げているけれども、北部に未開拓の土地があるので、1世紀は農業国に留まるであろうとフランクリンは見ている。彼はヒュームの1760年の論説「貿易の嫉妬について」の議論を歓迎した。それは人為を超えた市場の法則が、先進国の優位をいずれは覆し、後進国が追い上げるという論理を明示したものとして、先進国の傲慢を戒め、後進国を激励するメッセージとなった。けれども、この論説に関してはタッカーとの論争が展開され、タッカーは先進国の優位の持続説を主張した。ヒュームはタッカーに譲歩したとされているが、しかし、ヒュームがタッカーにどこまで譲歩したかについては解釈の余地があり、論争テーマとなってきた。とはいえ、同時代人がどう受け止めたかということも重要であって、フランクリンのアメリカにとってそれは支援となる議論であった。

ヒュームの自由貿易論は、ロックとハチスンの抵抗権論、同じくヒュームの理想の共和国案などとともに、フランクリンのみならずアメリカ人を激励した。ヒュームの見地に立てば、母国の植民地規制は、おのずから、すなわち長期的には、無効になるという結論が出てくる。ヒュームは後進国に対して農業に特化するモノカルチャー経済を推奨することはなかった。農業が大きなウェイトを占める社会もやがて手工業を生み出すようになることが経済発展と富裕化にとって不可欠であると考えていた。

農工商のインダストリ（勤労）に励むこと自体は必要であり、当座は交易条件が不利であっても後進国は農業だけでなく、手工業も育成するように努力すべきである。ヒュームの自由貿易論は単線的な国際分業論ではない。国際分業

と国内分業（国内市場）との振動あるいは相互発展、前者から後者への重心移動を視野に置いた複合理論である。ある程度の国際分業は風土的、地理的条件から、必要である。しかし、一国は農業だけでなく得意な手工業もあってはじめて豊かになりうる。工業製品の幾割かは国産でなければならない。一国から農業がなくなるのも論外であるが、農業だけで経済を営むのも望ましくない。

論説を読む限り、ヒュームには農業を高貴な技術として尊ぶという思想がないように思われる。自然と親しむ農業は、多面的な作業を必要とする複雑な事業でもあるから、単純な機械的技術（手工業）より高貴であるという思想が、アリストテレス、ヴェルギリウス、キケロなど古典古代以来、受け継がれてきた。啓蒙の時代においてはフランスのケネーなどのフィジオクラート（重農学派、自然支配を意味する）がよく知られているだろうが、スミスもその弟子のミラーも農業を活動として讚美している。

農業への関心ではフランクリンは、ヒュームよりケイムズ卿に近かった。フランクリンは『ジェントルマン・ファーマー』という著作もあり、みずからもジェントルマン・ファーマーであったケイムズと会い、手紙も交換していた。農業についても話し合ったことは間違いないであろう。紙数の関係で経済思想については改めて論じたい。

IV フランクリンの政治思想

フランクリンは独立革命に関与したが、もともと急進的な思想家ではなかった。すでに見た教育案に登場した文献などからもうかがい知れるように、個人の自助努力を重視する、むしろ穏健な自由主義者であった。

フランクリンは建設的な政治家として活動した。1748年にフィラデルフィア市会議員になって以降、フランクリンは51年にはペンシルヴァニア議会の議員、53年には植民地郵政長官代理を歴任し、植民地の発展のために活動した。それは大ブリテンの植民地としての発展という意味である。

フランクリンは、1754年の「オルバニー連合案」（オルバニーはニューヨー

ク近郊の地名)を執筆した。それはインディアンとフランス植民地の存在を意識した、植民地の統合運動の一案であった。1607年のヴァージニア植民地に始まり、1732年のジョージア植民地にいたる植民地建設は、「建設の時期、動機、契機、統治形体を異にして、分散的」¹⁷⁾であったが、対外的緊張関係の存在が、植民地間の統合を求めさせ、いくつも連合案が提起された。1643年のニューイングランド連合、1685年から88年にかけてのニューイングランド・ドミニオン、1697年のウィリアム・ペンの連合案、1754年のオルバニー連合案までは、インディアンとフランス植民地に対する緊張関係という文脈のものであった。その後の1774年の大陸会議におけるジョージフ・ギャロウェイの帝国連合案と対英通商断絶大陸同盟は、大ブリテンに対する対抗の文脈のものとなる。

植民地連合案については斎藤眞によれば4類型がありえた。連合の形成のイニシアティヴが植民地側にある「内発的連合」と本国政府側にある「外圧的連合」、連合組織の意思決定が植民地代表の連合議会に委ねられる「自治的連合」と連合総督を通しての本国側の決定権が重視される「帝國的連合」の4つである。フランクリンが関係した「アルバニー」は複合型であった。斎藤はこう述べている。

「ニューイングランド連合はほぼ完全な内発型自治的連合であり、ニューイングランド・ドミニオンはほぼ完全な外圧型帝國的連合といえる。オルバニー連合案は、いざさか他面的であり、内発型自治的連合、外圧型帝國的連合、さらに内発型帝國的連合の性格をもつ。まさにそれ故に、植民地側も本国政府側もオルバニー連合案を採択できなかった。連合の代わりに本国政府が採用したアメリカにおけるイギリス軍総司令官制をもし軍事的連合として捉えるならば、それはいうまでもなく外圧型帝國的連合の形体に属する。」(斎藤、前掲書、105-106ページ)

結局、ニューイングランド連合がいち早く目指した内発的自治的連合が大陸

17) 斎藤眞『アメリカ革命史研究』東京大学出版会、1992年、104ページ。

会議でも採用され、その後のアメリカが追求するものとなる。

フランクリンの大連合案の狙い¹⁸⁾は、各州から代表を出す大会議に結集し、北アメリカの植民地連合を創設することによって、(インディアンやフランス植民地などからの)脅威から自らの安全を確保すること(理由1)、個々の植民地より統一したほうが強いこと(理由2)、各植民地の個別利益追求を避けて全般的善を促進すること(理由3)、インディアンとの貿易は連合で規制するほうがうまくいくこと(理由4)、オハイオと湖の西部の新しい植民地の形成を指導することなどであった(理由5)。そこにはフランス植民地とフランスに対抗して大ブリテンの貿易と力を増強することへの明示的な表明こそ見られるものの、大ブリテンからの独立の意図はまったくなかった。フランクリンは、この連合によって植民地が独立した州(邦)として行動するのではなく、統一体であるという意識を持つようになることを期待した(理由6)。

オルバニー連合案は成立しなかったが、フランクリンは57年にはペンシルヴァニアを代表して英国に渡った。その後一度は植民地に戻って、ペンシルヴァニア議会の議長にもなったが、やがて再度英国に渡り、事実上の植民地の代表として、その後ながくブリテンと植民地の関係改善のために尽力した。フランクリンはアメリカが大ブリテンの4地域(イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド)と共に同じ国王を戴く対等の邦として複合君主国になるという帝国の原像を抱いていたように思われる。

ロンドン時代のフランクリンは、職務にいそしむ傍ら、2度のスコットランド旅行を行っており、2度目はアイルランドからスコットランドへと旅をしている。まだ帝国と植民地の関係はそのような旅行を許すものであった。フランクリンは、ケイムズ卿と親しく交友するとともに、年少のヒュームやスミスとも親交を深めた。またフランクリンは、植民地からスコットランドなどへと留学する青年に、ことあるごとに懇切な世話を焼いており、フランクリンの広い

18) Houston, Alan (ed). *Franklin, The Autobiography and Other Writings, op. cit.*, p. 240. この連合案の内容と文脈については斎藤、前掲書、112-117ページを参照されたい。

人間関係が威力を発揮した。

フランクリンがブリテンにいて遠くから眺めていた英仏七年戦争（アメリカではフレンチ・インディアン戦争：1756-1763年）は愛国者ピットが指揮した戦争であり、植民地ではワシントンが軍人として経験をつんだ。戦線はアメリカではオハイオ渓谷の領有権からカナダへと拡大した。英仏両国は植民地拡大を目指しており、早晚雌雄を決するときが来るのは、予想されていた。しかし英仏の覇権争いはアメリカにおける両国の軍事的対決に留まらず、ロシア、プロイセン、オーストリア、スペインを巻き込み、戦線はヨーロッパ、カリブ海域、西アフリカ、インド、フィリピンへと拡大し、レーニンが「旧帝国主義戦争」と呼んだように、さながら世界戦争であった。

七年にわたる消耗戦の結果、大ブリテンが勝利をおさめたとはいえ、戦争の打撃は大きく、戦後の植民地経営に大きな問題を引き起こした。歴大な戦費による巨大な財政赤字を抱え込んだ母国は植民地課税に踏み切った。しかし、関税ではなく、植民地への直接の課税は前代未聞であった。そもそも課税と代表の一体性はロックが明確に表明したように、英国の国制の歴史的伝統であった。もともと税金は一時金として、封建中世にあって国王が戦費を賄うために諸侯が集まる封建議会において諸侯に支援を要請するということから始まった。したがって、古来の国制として伝承されてきた思想的伝統において課税は同意を必要とするものだったのである。チューダー朝からステュアート朝へと議会政治が発展する中で、国民を代表する議会の同意が決定的な重要性を持つようになっていた。そして17世紀の内乱を経て、均衡国制として確定した名誉革命体制は、国王、貴族院、庶民院の均衡と牽制の制度として、統治経費を賄う課税はますます重要な要素となっていた。統治者が自ら調達するものではなく、各種の租税によって賄うべきものとなった。

合邦と財政金融革命によって大ブリテンが大きな植民地を要する帝国になるにつれ、統治経費はますます巨大になって行く。領土も人口も経済の規模も拡大し、官僚機構も軍隊もますます大規模になりつつあった。大ブリテンは領土

的帝国である以上に海洋帝国として拡大したが、帝国の経営費は巨大なものであった。そうしたなかで北米植民地の発展は目を見張るものがあった。こうした文脈において、大ブリテン政府が植民地課税を考えるのは理の当然であった。

イングランドでは印紙税は1694年から行われていた。それを植民地にも課するという印紙法案を1765年3月に本国議会は可決した。植民地の法的書類、保険証書、新聞、暦などに直接課税されることになったが、しかし、植民地は課税に応じなかった。印紙法会議が開かれ、課税に反対との決議が行われたが、それにもまして民衆の暴力行為が功を奏した。本間長与はこう書いている。

「1765年8月14日に、マサチューセッツの印紙配布官のオフィスと自宅を群衆が襲って破壊し、翌日には印紙法を執行しない約束をとりつけた。このニュースが他の植民地に伝わると、各地で同じような暴動ないしその危険が発生し、店舗経営者、印刷業者、親方職人、小規模の商人など、社会の中間層に属する人びとを中心として、各地に「自由の子供たち」と称する抵抗組織がつくられ、かなり過激な行為——本国からの役人の人形を焼くとか、印紙取扱者を辞任させるとか、本国製品の輸入をおさえるなど——を重ねるに至った。本国では首相が代わり、……1766年2月に印紙法は1年足らずで撤回されてしまった。」¹⁹⁾ 理性以上に、民衆の過激な直接行動、あるいは暴力がきわめて有効であった。

1774年にマサチューセッツ総督トマス・ハチンスンの免職請願事件が起こった。そのきっかけは、二年前のフランクリンによるハチンスンの手紙の漏洩であった²⁰⁾。印紙法の発案者、本国政府高官トマス・ウェートリ (Thomas Whately) に宛てたアメリカ人の手紙がたまたまフランクリンの手に入った。手紙は1767年から69年に書かれたものであるが、そのなかにハチンスンのものがあった。ボストンに生まれたハチンスンは当時、副総督であったが、「イギリス人の自由」は植民地では制限すべきであると書いた。宣言法だけでは駄目

19) 本間長世『共和国アメリカの誕生 ワシントンと建国の理念』NTT出版、2006年、107-108ページ。

20) 以下基本的に、Morgan, Edmund S., *Benjamin Franklin*, Yale U. P., 2002, pp. 185-188, および本間、前掲書、142-144ページ。

で、議会は植民地の不買運動を挫き、処罰しなければならないと述べた。ハチンソンは祖国を内乱、無政府状態から救う策を述べたつもりであったが、フランクリンにはいっそうの自由の規制は植民地にとっても帝国にとっても破滅であった。

ハチンソンはフランクリンにマサチューセッツの混乱は一人か二人の策謀によると語ったが、フランクリンにはそれはハチンソンを意味した。そこで手紙を公表すれば議会への反感はハチンソン一味に向けられ、事態が收拾できると判断したフランクリンは、手紙をマサチューセッツに送った。しかし、手紙の公表は植民地人の怒りに油を注ぐ結果となった。やがて1774年1月29日に、フランクリンは枢密院のいわゆる「闘技場」に呼び出され、法務次官ウェダバーンの厳しい尋問を受けた²¹⁾。辱めを受けたフランクリンは、1時間の間、沈黙に終始したと言う。結局、フランクリンは騒動の首謀者だということになり、北アメリカ郵政長官代理の職を解任された。こうして意図せざる歴史の展開によって、フランクリンは植民地独立の方向に大きく舵を切ることになった。

スコットランド出身のウェダバーン (Alexander Wedderburn, 1733-1805) はエディンバラ大学で学び、1754年にスコットランドの法曹となった。1756年にはジョン・ヒュームの『ダグラス』事件があり、ウェダバーンはヒュームを擁護した。それはロバートソンなどモデレート知識人の雑誌『エディンバラ・レビュー』の同人であった彼の思想から当然であった。モデレートは守旧的長老派が牛耳るスコットランドに社会的な文明を普及し、社会の自由主義的な改革を推進しようとしていた啓蒙派であった。彼らは合邦を所与として受け入れ、イングランドの自由な文化を導入しようとした体制内改革派としてアーガイル派に近く、したがってアーガイル公爵の恩顧を受けてもいたが、『エディンバラ・レビュー』がスコットランド教会の民衆派＝正統派の攻撃を受けて2号で刊行停止となるほど守旧派の力も強かった。

1757年にウェダバーン²²⁾は、ケイムズの古い論敵であったロックハート

21) Morgan, *op. cit.*, pp. 202-203.

22) Ross, Ian Simpson, *Lord Kames and Scotland of his Day*, Oxford U. P., 1972, p. 169.

(Alexander Lockhart) と高等民事裁判所で口論をし、謝るところか高等民事裁判所長官クレイギーを侮辱してさっさと法曹を辞任し、イングランドへ出た。インナー・テンプルに迎えられたウェダバーンはビュート卿の恩顧²³⁾を得て、下院議員となり (1768-1778)、また1771年には法務次官に昇進していた。トーリーを捨てて1769年にはウィルクスを擁護したウェダバーンは、トーリーに戻ってノース内閣に入り昇進を遂げ、最後には1793年には大法官にまでなった。変わり身も早かったが、彼の弁論能力は卓抜だったのであろう。70歳近くになっていた老フランクリンは、30歳近く年下のウェダバーンの弾劾をどのような思いで耐えたであろうか。

1775年には武力衝突が避けられず、フランクリンは植民地に戻り、アメリカの独立のために力を尽くした。彼はペンシルヴァニア州代表として大陸会議に参加し、76年には独立宣言起草委員のひとりとなり、宣言書に署名した。

フランクリンは、その直後76年暮れから85年にかけておよそ10年近くフランスに滞在して、世論のアメリカ支持を勝ち取るために活動した。フランクリンの活躍によってアメリカは、78年にはフランスとの同盟条約を結び、83年には大ブリテンから独立の承認を取り付けるパリ条約を締結した。フランス滞在はフランクリンにとって実り多いものであった。外交的成功がまずあげられるが、フランスの啓蒙思想家との交流もあった。1788年にフランクリンはヴォルテールと会った。それは新旧世界の思想界の代表の邂逅であった。

やがて、アメリカ独立革命はフランスに革命精神を伝える。しかし、フランス革命はアメリカとはまったく異なる課題を持ち、まったく異なった運命を辿ることになる。

23) ジョージ3世の側近としてビュートは惜しげもなく恩顧を支持者に与えた。例えば、『ダグラス』のヒュームはビュートの秘書となり、300ポンドの年金とさらに同額の価値ある官職を得た。ウェダバーンの発音を矯正したシェリダンは200ポンドの年金を得た。Griffin, *op. cit.*, pp. 61-62.